

目的別に考える大学生活の成果

—因子分析を用いて—

HS23-0118B 竹中淳悟

近年日本では大学進学率が高まっている。しかし一方で授業に熱心でない学生も増えており、諸外国の学生と比較しても日本の大学生は勉強だけが目的ではないことがわかった。そこで本稿では近年の日本の大学生が志向する大学生活の目的を説明変数に、そして大学生活での成果を従属変数にして理論仮説を作成し分析を行った。また文系と理系でモチベーションに差があること、国立と私立に対する意識の差なども近年の大学生に関する事象であることを鑑みて、説明変数の一つとした。使用したデータはベネッセ教育研究所が2008年に実施した「大学生の学習・生活実態調査」であり、分析手法として説明変数を大きく勉学志向と非勉学志向の二つに分類するための因子分析と重回帰分析を用いた。

分析結果ではまず勉学、非勉学が卒業後に身に着ける能力に差が見られるという仮説において勉学要素の方が従属変数に及ぼす影響が大きくなっており、ここから勉強に重きを置く方が社会に出たときにやや有利であることが判明した。次に文系理系で卒業後に身につく能力に差が見られるという仮説において、従属変数がそもそもコミュニケーション力を中心とした文系職に必要とされているものを中心としていたために、目指す方向性が違うことから身につく能力にも差が見られるという結論に達した。最後に国立大学と私立大学で身につく能力に差が見られるという仮説では国立の質実剛健な学風よりも私立大学の柔らかな学風の方が多様な議論を生み出せること、また私立大学では積極的にアルバイトやサークル活動を行い、そこからチームワーク力や自己管理能力を身に付けられることがわかった。まとめとしては説明変数と従属変数に強い相関が見られた一方で、統制変数にはあまり強い影響を及ぼさなかったことから、学生生活では学部学科など選択したものよりもそこでいかに真剣に取り組めたかが重要であると考察するに至った。